

チン切りサイコメトラー娘
レイパーにはちよん切りリンチ！
大・丈・夫、超能力で冤罪なし！



玉子王子 著

1章 標的はヤリチンレイパークズ男のヤリチン

うさぎ高校の校舎裏。

男女が向かい合って立っていた。

相島栄子は、巨乳である。

顔もよく、男子に人気がある。

が、男と付き合ったことはなかった。

クラス一のイケメンに今告白されている。

「手、握っていい？」

「もちろん、手でも何でも」

ニヤ、と笑うイケメン。

——これで顔だけでモテるんだから。

呆れる栄子。

しかしまあ、これでも二番目にモテる男よりはましなのだ。

二番目は、別に顔がいいわけではない。しかし強引で、誰彼構わず声をかけ、しつこいからときつく断って殴られた子もいるという話。

それでも、悪いのがかっこいいと言って引っ付いていくのもいるから、ますます同じような行動をとるのだ。

それに比べれば、「ちょいセクハラかなあ？ 考えすぎかなあ」という程度のイケメンの台詞はまだましだろう。

とはいえ、潔癖な若い娘にはきつい。

この時点ですでに付き合う気はなくなったが、念のため手を握る。

パリ、と小さな音が栄子の頭の中でだけ響く。

パリ、と小さな音が栄子の頭の中でだけ響く。
その後、イケメンの声が響いてくる。



あー、すげえデカパイ。揉みてえ揉みてえ揉みてえ、
処女らしいから、俺の短小チ○ポでも
気にしないだろう。っていうか、気づかないだろう。
バコバコしまくってやるぜ。まあ見た目だけの巨乳だ、
すぐ飽きるだろうけど。



もう十分、と手を離す。
——最低のクソチ○ポじゃないの。
……いや、小さいのが悪いってことじゃないよ？

その後、イケメンの声が響いてくる。

あー、すげえデカパイ。揉みてえ揉みてえ揉みてえ、処女らしいから、俺の短小チ○ポでも気にしないだろう。っていうか、気づかないだろう。バコバコしまくってやるぜ。まあ見た目だけの巨乳だ、すぐ飽きるだろうけど。

もう十分、と手を離す。

——最低のクソチ○ポじゃないの。……いや、小さいのが悪いってことじゃないよ？

頭の中で誰に言い訳しているのだろうか。

頭を下げる。

「ごめんなさい」

「ええ！？ なんで？ 付き合いもしないでそれはおかしいよ」

——意味わからんわー。

振られるなどと思ってもいなかったらしいイケメン男が心底動揺するような顔をする。

手を握れば、内心のことはわかる。

だが、もうそうするつもりは無い。

必要な情報は得た。

栄子は、いわゆるサイコメトラーだった。

人間の脳は電気信号によって思考している。

それが空間や物に焼き付けられるのを、読み取れる超能力だ。

と、栄子は自分の力を解釈していた。

ネットや本で自分のような力が何なのか調べた結果の大体の答えだ。

引っ込み思案で、人と関わらない子供だった。

だから、こういう能力があることを人に知られずに済んだ。

分別がつく前から親しい人間がいれば教えずにはいられなかっただろう。

そして知られれば、面倒な事になったに違いない。

ラッキーといえるだろう。

彼女は完全にこの能力を隠して生きていた。

ただ、使うことは使う。

近付いてくる人間がどういう人間か知る必要があるとき、使うことが多い。

特に、見栄えがいいので寄ってくる男は多く、彼らの中からましな内面のものがないか能力で判別していた。

結果は、全員だめだった。

体が目当てのものばかり。

まあ、若い男子だから仕方ないだろう。

ある程度付き合っただけで体を許してやれば、余裕も出来て精神的なつながりも生まれるかもしれない。

だが、処女の娘がそんなことを悠長に考え、誰かと付き合おうとは思えなかった。

——男なんて、女を道具だと思ってる。

相手のことを思って隠す部分もあるだろうに、勝手にそれを覗き見て嫌うのは勝手な話ではないか。いずれそれに気づいて達観するだろうか。

そうなるのにある程度の経験が要るとすれば、その経験を積み難い振る舞いをしている栄子はどうなるのか。

「ちょっと待ってよ、俺の何が気に食わないの？　こういっちゃ悪いけど……クラスのオタク連中とかと比べたら、人間違うよ？」

「はあ、でも……」

ず、と体を寄せる。

小声で囁くように言う。

「おチンチ○では負けてるよね？」

「な」

真っ青になるイケメン。

モテるだけに、多くの女にその事実は知られている。

しかし、隠してもらえる自信はあった。

実際、隠してもらっている。

……まあ、親しい友人間のガールズトークでは語られてしまうが、不特定多数に知られるまでにはいたっていない。

だから、友人がいなさそうな栄子にそれを知られているのは驚いた。

同時に、直接言われてしまう事に。

「こ……」

真っ赤になるイケメン。

と、それを手で制する。

「なんちゃって……そんなことある分けないよね？」

「そ、そらそうよ」

ふざけて言っただけか、と慌てて気にしない振りをするイケメン。

実際問題、ふざけて言う台詞ではない。意味がわからない。

だが人間は信じたいことを信じるし、短小の事実は知られていないはずというのは正しい観測なのだ。

栄子が超能力を持っている、などということは想像も想定も出来ない、人間の限界を超えている。

「仮にペ○スのサイズで劣っていても……」

歯を見せる。

「経験なら間違いだから、ヤリチン短小の方が巨根童貞より絶対上よ」

「そ、そらそうよ……いや！ 別に短小じゃないけど！」

笑って唾を返す栄子。

これでもう関わってこないだろう。

こういうことをしたら、二番目のクズは殴りかかってくるのだろうか。

まったく、気分が悪くなる。

断ったら怒るかも、と脅しを背景に女に近付いていけるなら、どんな腰抜けでも積極的にになれるし、それで成功する事もあるだろう。

教室に戻る。

と、そのクズがイライラした感じで出て行く。

少し後で、女子が出て行く。

思えば、ここ一週間かそこら、ずっとその女子は塞ぎこんでいた。

守山水鳥。

地味だが、見栄えはいい。

男にとってはねらい目だろう。

女子のカーストは部活と押しの強さで決まり、上なほどももちろん恋人としても価値ある女とされる。

しかし実際の所、栄子にはカーストップのギャルがかわいいとは思えなかった。

いや、化粧の努力は買うが、顔形はまずいのだ。

それでも、隣のクラスのカーストップの男子と付き合っている。

男子のカーストは部活と顔で決まるので、上のものは当然イケメンだ。

イケメンと化粧が上手いブス——とまでは栄子ははっきりとは考えないが、どちらかといえばそっちよりだと曖昧に思っている——が付き合うというのはバランスが取れないのではないか。

だがまあ、男子にとっては夢がある、かも知れない。

イケメンと美人が普通に付き合いました、よりも、女子のカーストにはいろいろあるので、イケメンが引っ掛ける一番いい女は別に美人じゃない、という方が普通の男にとっては美人を引っ掛ける可能性が高まるだろう。

どうでもいいことを考えながら、なんとなく水鳥についていく。

嫌な予感がした。

栄子のそういう予感は当たる。

超能力で人間の本音を見ることが多いからか、あるいは「勘がいい」という超能力も持っているのだろうか。

とにかく、嫌な感じだと思ったら大体それは当たってきた。

水鳥は校舎裏に向かった。

先に出たクラス二番目に持てる男が待っていた。

何か話して、突然男の拳が水鳥の腹に減り込む。前へのフックの形。

「あっ」

思わず声が出た。

女を殴ると言っても、普通は頬だの肩だのだろう。

それも、平手打ちぐらいではないか。

それが、よりによって腹を殴る。

腹、女の場合子宮があることぐらいわかっているだろう。

まあボクシングで腹を殴りあったりもするが、普通は避ける。

生殖器周辺を軽がるしく攻撃などしない。

いや、ナノテクでどんな怪我でも大抵治る時代だ。

最近流通し始めた最新のナノ薬を飲めば、たとえば睾丸が潰れたというぐらいの怪我なら十秒で治ってしまう。

だから、力が無い女が男の不当な行為に対抗するためなら、急所攻撃はありだと栄子は思う。

しかし、同じように治るからと言って女の腹を、力で勝る男が攻撃する事は許されないのではないか。

——あの野郎、キ〇タマ潰したいわ。すぐ治るんだし。

建物の影から睨む。

二番目にモテる男、坂東高貞。

膝を突く水鳥。手を伸ばすが、振り払う坂東。

そして蹴り。

横蹴りでまたも腹の辺りを蹴る。

唇を噛む栄子。

想像以上のクズ男だ。

踵を返し、栄子がいる反対側を通って去っていく坂東。

腹を抱えて転がった水鳥だけが残される。

思わず、栄子は駆け寄っていた。

「森山さん……」

「あ、相島さん……なんでもないよ、別に」

何とか顔を起すが、涙と鼻水でぐしょぐしょだった。

何も言わず、慰めるように肩に手を置く。

それだけで、栄子は事情を読み取ることが出来る。

何でもではないが、これほどの状況に追いやられた理由は頭の上のほうに上がってきているだろう。

順序だてた説明などないが、引き出すことはできる。

「何でこんな事に？ 無理には聞かないけど……」

「……」

坂東くんは無理矢理セックスされたの。レイプ。でも、こんなこと言えるわけない。しかも、妊娠しちゃって……ああいう人だから、こういうことも慣れてるのかと思って話したら、勝手に何とかしろって。でも、親にもこんなこといえないし……今日もう一回言って、どうにもならないなら自殺するかもっていったら、俺を脅すのかって怒って……これで流せって殴られた。

スプーンを瞼の下に突っ込まれたように、驚きと恐怖、信じられないという思いで水鳥を見る。あるはずがないことだ。だが、サイコメトリーで読んだ内容は嘘ではない。

坂東くんは無理矢理セックスされたの。レイプ。でも、こんなこと言えるわけない。しかも、妊娠しちゃって……ああいう人だから、こういうことも慣れてるのかと思って話したら、勝手に何とかしろって。でも、親にもこんなこといえないし……今日もう一回言って、どうにもならないなら自殺するかもっていったら、俺を脅すのかって怒って……これで流せって殴られた。

スプーンを脛の下に突っ込まれたように、驚きと恐怖、信じられないという思いで水鳥を見る。
あるはずがないことだ。

だが、サイコメトリーで読んだ内容は嘘ではない。

嘘を完全に信じ込んでいた場合でも、表面的な話と同時に読み取れる記憶の断片で間違っているとわかる。まして、嘘なら完全に見抜けるのだ。

——本当のことなんだ……信じられない。人間じゃない……
手が震える。

それでも、さっさと読み取りを切り上げられる状況ではない。

記憶の断片が頭の中に浮かぶ。

突きつけられる異形。

それがなんなのか知識では知っていても、見たことは無い男の生殖器。

上のほうに、坂東の顔。

栄子にも、その一物が巨大な部類なのがわかった。

クラスのおタク男子がフルチンにされているのを見た。

彼らのモノは巨大だと嘸し立てられていた。

それと同じぐらいの大きさだ。

無理矢理フルチンにされ、縮み上がったのと立ったのが同じなら、いくら劣るとの判断には、栄子はたどり着かない。

立ったり縮んだりすることはわかっているが、まだ腹に落ちていない。

彼女の前で、そういうことをした男はまだいないのだ。

——うう、なにこれ……気持ち悪い……

吐き気がした。

「森山さん、坂東と何かあったの？」

「な、何もないよ。本当だよ？」

始めは、女の子の部分で中に出した。

次はお尻。

その後、無理矢理、啜えさせられた。

お尻に入れたアソコを、啜えさせられた。

「嘘！？」

「う、嘘じゃないよ！ 何もない！」

「あ、違う……そうじゃなくて」

そういつて黙る。

読んだ記憶が信じられなかった、とはいえない。

まだ、読み続けている。

お尻に入れたアソコを舐めさせたとき……坂東くんは物凄く楽しそうだった。なんでだろう？セックスってお互い楽しくないと……少なくとも男の人は、女の子が喜んだら自分の力だって思って楽しいんじゃないの？ あんな、絶対相手が嫌がることを……

「ううっ」

手を離してしまう。

これ以上心を読みたくない。

見たくない記憶の断片が脳裏に浮かぶのも我慢なら無い。

いや、我慢ならないのは、そんなものではない。

我慢ならないのは、坂東だ。

「相島さん、どうしたの!？」

「うう……私、実は……あいつにレイプされた事あるの。もしかしたら、もしかしたら森山さんもって……」

嘘だ。

サイコメトリーを隠して、話を前に進めるためにいっているだけ。

涙は、水鳥の苦しみに対して流れていた。

——許さない、坂東の奴。

水鳥、それに、多分いる他の被害者の女の子。

彼女らの無念を晴らすために、復讐してやる。

そう誓う相島。

相島自身は、復讐する権利は無い。

だが他の女の子を手伝うことは許されるだろう。

性犯罪は、はっきり言って「言った者勝ち」の面もある。

突然性犯罪者とされた人物が、大企業を告発したことがあった。

性犯罪者が何を言う、というのがメディアの論調だった。

が、栄子は引かかった。

逆ではないかと。

そういわせるために、「被害者」をでっち上げて、都合が悪い告発をしようとする人間を陥れたのではないかと。

マスコミはいい加減なので、それらしい話があればそれらしく報道するだけだ。

しっかり調べたりはあまりしない。

毎日大量のニュースを流す関係上、さほど深いうらどりも出来ないのだろうが。

いや、もちろんその告発者は本当にやったのかもしれない。

やっていないのかもしれない。

よく分からない話だ。

第三者にわかることではない。

だから安易な復讐になど加担できたものではない。

だが、坂東の場合、そんな冤罪の可能性は無い。

だが、坂東の場合、そんな冤罪の可能性は無い。
遠慮なく復讐していい。
超能力で彼の罪は確定しているのだ。
どう復讐するか。



そんなものは決まっている。
彼の犯罪に使われた道具に復讐するのだ。
ご自慢の、

立派な男性器に。



遠慮なく復讐していい。

超能力で彼の罪は確定しているのだ。

どう復讐するか。

そんなものは決まっている。

彼の犯罪に使われた道具に復讐するのだ。

ご自慢の、立派な男性器に。

体験版終わり

最低の性犯罪者坂東に迫るチン切りの恐怖。

切られても治る世界のなので何度も切られまくるファッション去勢地獄が彼を待つ。

続きは製品版でお楽しみください